国内外で活躍！地方銀行のスポーツチーム

企画調査部　豊島 愛理

- 地方銀行の中には、全国屈指の強豪スポーツチームを運営したり、有力選手を行員として採用すること等を通じ、地域のスポーツ振興に取り組んでいる銀行があります。
- こうした取り組みは、地域に明るい話題を提供するほか、行員のモチベーション向上につながっています。
- 今回は、そうしたスポーツチームの活動状況や、仕事と競技を両立している選手の日常等について紹介します。

はじめに

侍ジャパン（野球日本代表）がＷＢＣ（ワールド・ベースボール・クラシック）優勝！ 男子バスケットボール日本代表・男子バレーボール日本代表がワールドカップでパリ五輪の出場権獲得！ ラグビー日本代表がワールドカップで強豪相手に大健闘！ 2023年はスポーツで手に汗を握りながら、日本中が熱狂しました。スポーツには、経済・社会を活性化する効果に加えて、人々の心を元気にする効果もあると言えるでしょう。

地方銀行の中には、地域をスポーツで盛り上げようと、スポーツチームを設置して活動している銀行があります。全国屈指の強豪として日本代表選手を何人も送り出しているスポーツチームを保有している銀行があるほか、地元出身の有望選手を行員として採用し、2024年のパリ五輪出場に向けた挑戦を支援している銀行もあります。

今回のレポートでは、銀行業務と競技を両立させながら、全国で活躍する地方銀行のスポーツチームや選手を紹介します。

北國銀行×女子ハンドボール

（無敵の常勝軍団）

「絶対王者」。それが石川県に本店を置く**北國銀行**ハンドボール部Honey Beeです。地元ハンドボールの強豪・小松市立女子高校（現小松市立高校）の出身選手が同行に多数在籍していたため、こうした地元選手に活躍の場を提供することを目的に、1975年にハンドボール部は創部されました。

これまで、日本リーグ９年連続10回優勝、全日本社会人選手権８大会連続９回優勝、日本選手権４年連続７回優勝、国体９大会連続14回優勝。直近２年間は負けなしと、まさに無双。また、本年９～10月に中国・杭州で開催されたアジア大会では、日本代表「おりひめジャパン」に選手７名を送り出し、日本の初優勝に大きく貢献しました。今後、おりひめジャパンは、パリ五輪出場をかけて、世界選手権や世界最終予選に挑みます。

▲ 試合の様子。北國銀行提供。

１年半前に現役を退き、現在は総合企画部でハンドボール部の広報を務める河田 知美さんは、強さの秘訣について、「常に厳しさを持ち、当たり前のことを徹底し、一戦必勝でがんばっているだけ」と話します。練習のときから、大きな掛け声で、攻守が激しくぶつかり合い、速いパスワークからジャンピングシュートを決める姿は迫力満点。いつも全力で走る・跳ぶ・投げるという基本練習を繰り返しています。

また、「銀行がハンドボールに集中できる素晴らしい環境を用意してくれる等、全面的にサポートしてくれるのも大きい」と話します。ハンドボール部の練習拠点は、金沢駅より北陸本線で３駅の松任駅から、車で約10分の「北國銀行スポーツセンター」。のどかな田園風景が広がる中、体育館２棟とグラウンドがあり、ハンドボール部の寮も併設されています。

▲ 練習拠点である北國銀行スポーツセンター。

（地元の声援を力に）

部員は現在19名で、全員が20代と若いチームです。仕事は選手の希望や現役引退後のキャリアを考えて配属されており、営業店で窓口業務を行う選手や、本部のシステム部でエンジニアとして働く選手がいます。平日は８時40分から15時まで勤務し、16時30分から18時30分頃まで毎日練習しています（休日は、土曜日の午前中のみ練習（試合日を除く））。

ハンドボール部は、同行にとって大きな誇りであり、ホームゲームには多くの行員が応援に駆け付ける等、銀行の一体感を醸成する原動力になっています。また、河田さんは、「全国屈指の強豪であるがゆえに、地元の期待も高く、地元紙の一面を飾ることも珍しくない。銀行のＰＲにもなっている」と話します。

選手は、ハンドボール教室の開催や地域のイベントへの参加等、地域の人々との交流も積極的です。ホームゲームには地元ファンが応援に大勢駆け付け、試合後は選手のサインを求める行列もできます。

（前人未踏の領域へ）

同行の親会社である北國フィナンシャルホールディングスは、小松市に１万人が収容可能なアリーナの建設を検討しており、スポーツ・エンターテインメントを中心とした地域の賑わい創出の拠点とする計画です。その象徴として、ここをハンドボール部の本拠地とする構想であり、銀行や地元の期待がますます高まっています。

チーム名「Honey Bee」の由来は、「働き蜂のように小さいのによく動く」。伝統の「堅守速攻」に磨きをかけ、「誰も成し遂げていない日本リーグ10連覇を必ず達成する」と、河田さんは力強く宣言します。

▲ 選手の集合写真。

南都銀行×女子ホッケー

（栄光の軌跡）

奈良市の中心部から近鉄奈良線で３駅目の「菖蒲池駅」。駅から小学校と幼稚園の間を約７分歩くと、「南都銀行健康保険組合　あやめ池保養所」の人工芝のグラウンドが見えてきます。ここが奈良県に本店を置く**南都銀行**のホッケー部SHOOTING STARSの練習グラウンドです。

ホッケー部は、1982年、地元で２年後に開催される「わかくさ国体」を契機に、創部されました（同国体では、同行所属選手が５名選抜された奈良県代表が見事初優勝）。

そこからのホッケー部の活躍は目覚ましいものがあります。全日本社会人選手権では４回、全日本女子選手権でも１回優勝しています。また、奈良県代表として出場した国体では、これまでに13回優勝しています（同行単独チームとして出場した2017年、2018年には２連覇を達成）。さらに、同行所属選手が日本代表「さくらジャパン」に選ばれ、五輪にも出場しています。今後、さくらジャパンは、パリ五輪出場をかけて、世界最終予選に挑みます。

▲ 選手の集合写真。南都銀行提供。

◀試合の様子。南都銀行提供。

（ホッケーを知ってもらう）

ホッケーのボールは硬式野球ボールよりも硬く、シュートは150～200km/hにも達します。ホッケーの魅力について、主将兼コーチの早戸和希選手は「スピードと球際のせめぎ合い、１対１の駆け引き、たくさん点数が入るスポーツではないので１点の重み」と話します。

部員は18名で、寮生活のかたわら、全員が本部勤務しており、審査部、人事総務部、市場運用部、事務サポート部等、各部署に１～２名程度分散して配属されています。

平日の練習は週２日。練習のある火・金曜日は８時30分から12時まで勤務した後、14時から17時30分頃まで白球を追いかけています（練習のない月・水・木曜日は８時30分から17時10分の定時勤務）。休日は、自行専用バスで広島県や関東地方等に遠征して、公式戦や練習試合を行うことが多く、本年の９月には韓国遠征を行いました。

周りの行員は、ホッケー部の活動に大変理解を示しています。７月に大阪で行われた大会には、猛暑の中、450名以上の行員が応援に駆け付け、見事に勝利を届けることができました。

ホッケー部は社会貢献活動にも熱心です。地元の小学生等を対象としたホッケー教室の開催や、お揃いの練習着を着用しての街の清掃活動等を行っています。こうした活動を通じて、ホッケーの魅力やホッケー部の知名度を上げる取り組みに力を入れています。

▲ 練習の様子。

▲ 得点して喜ぶ選手と同行応援団。南都銀行提供。

（栄冠を目指して）

今シーズンは、世代交代の過渡期にあり、若い選手が多く、苦戦を強いられました。ホッケー部チームマネージャーの樋口修さんは、「１対１の攻撃と守備に課題があった」と言います。

ホッケーのグラウンドは、本来、サッカーのグラウンドを一回り小さくした広さですが、同行のグラウンドは正規の広さの４分の１しかありません。このため、狭いグラウンドでも練習できる１対１の強化を徹底し、「狙うは18年ぶりの全日本女子選手権優勝」と、早戸選手は声高らかに意気込みます。

富山銀行×男子陸上競技

（憧れの選手はあの人類最速の男）

富山銀行に、スタートから約10秒にすべてをかける選手がいます。男子100m走の有力選手である入行２年目の行員で、陸上競技部唯一の部員である福島 聖選手です。

もともと走るのが速かった福島選手が陸上競技を始めたのは、小学校４年生のとき。2009年の世界陸上ベルリン大会で、ジャマイカのウサイン・ボルト選手が、100m走９秒58の世界新記録を出した光景にくぎ付けとなりました。小学５年生のときに100m走で全国２位、中学から200m走に変更し、高校で全国優勝しました。

その後、地元の富山大学に入学しました。ケガに悩まされた時期もありましたが、200m走を専門としたことで、中盤にトップスピードを出す脚力が付いていました。この武器を生かして世界を目指すため、100m走に再転向した結果、４年生のときに10秒31の自己ベストを記録しました。

（地元にこだわる）

福島選手は、大学まで地元で陸上競技を続けてきましたが、社会人になっても地元で競技を続けることは難しいのではないかと考えていました。そんな矢先、富山銀行が、デュアルキャリア（競技活動と仕事の両立）の充実を支援する取り組みとして、2022年に「アスリート採用」を新設し、福島選手はその第１号として採用されました。福島選手は当時を振り返り、「『嬉しい』の一言しかなかった。銀行が全面的にサポートしてくれるので、結果を出して銀行に恩返しするしかないと思った」と言います。

結果はすぐに表れました。2022年５月の富山県陸上競技選手権大会で、10秒17の自己ベストをたたき出し、同月開催の「セイコーゴールデングランプリ陸上2022東京」では、世界の有力選手が集まる中、決勝進出を果たしました。

福島選手は、銀行では営業統括部に配属され、各営業店の預金・貸出の残高データ等の分析を担当しています。毎日、計数をチェックする中で、「上司や先輩の助言等を受けながら、計数が変動する要因を分析するのがおもしろい」と言います。

平日は毎日８時40分から15時まで勤務し、月・水・木曜日は、自宅近くの陸上競技場で17時から19時まで、１人で練習しています（火・金曜日は身体のケアに専念）。休日は、母校の大学生と一緒に練習しています。

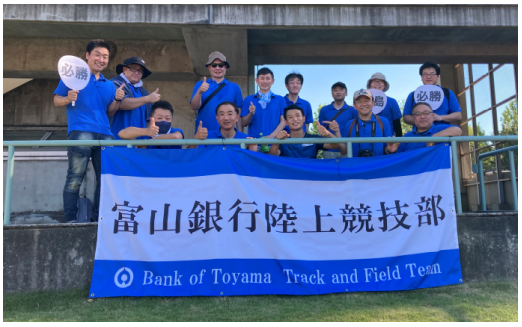
▲ １着でゴールする福島選手。富山銀行提供。

（銀行のユニフォーム姿で目指すは夢の９秒台）

４～10月のシーズン中は年間12～13試合あり、県内で開催される大会には行員も応援に駆け付けます。福島選手は、周りの行員から「『次の大会もがんばってね』と声をかけられるのが、やる気につながっている」と話します。また、総合企画部 広報・CSRグループの中嶋尚大さんは、「富山県内では負けなしで応援し甲斐がある。全国大会では富山銀行の名前の入ったユニフォーム姿の福島選手がテレビ画面に映り、誇らしく思う。銀行の知名度も上がるので、とてもありがたい」と話します。

福島選手は、アスリート採用者として、陸上教室の開催やイベントへの出演等、地域との交流も積極的に行っています。６月には母校の小学校の運動会にゲスト参加し、一流選手の走りを披露するとともに、小学生が一生懸命走る姿にさらなる活力を得ました。

今後の目標は、日本で４人しかいない９秒台を出し、2024年のパリ五輪と2025年に東京で開催される世界陸上に出場することです。福島選手は、「自分の武器である中盤の伸びを突き詰めればチャンスはある」と話します。



▲ 左：テレビ画面に映る福島選手、右：福島選手の応援に駆け付けた行員たち（前列中央が福島選手、前列右から２人目が中嶋さん）。富山銀行提供。

関西みらい銀行×女子漕艇

（創部第一期生）

「水面との距離が近く、水の上を滑る感覚が新鮮」と、漕艇（ボート）の魅力を語るのは、大阪府に本店を置く**関西みらい銀行**の新入行員で、女子漕艇部の唯一の部員である中尾 咲月選手です。

漕艇は、波や風にも影響されながら、1,000mまたは2,000m先のゴールを目指す過酷な競技です。中尾選手は、先輩に誘われて高校から漕艇を始めました。すぐに頭角を現し、高校２年生の全国大会で２位に、その後進学した強豪の早稲田大学では漕艇部女子主将も務め、全国大会で２位の成績を上げました。ただ、学生時代に優勝できなかったという心残りがあり、社会人になっても漕艇を続けたいとの思いがありました。

その頃、2025年に滋賀県で開催される国体に向け、同行は、前身のびわこ銀行に女子漕艇部があった経緯もあり、2023年４月に漕艇部を新たに設立しました。中尾選手は、「何もないところで競技をするのはリスクが大きいが、新しくチームを作る経験は他ではできない」ことに魅力を感じ、同行に入行しました。

４月に入行し、１か月間は銀行業務の新入行員研修がありました。それにもかかわらず、５月に琵琶湖で開催された全国大会「第74回朝日レガッタ」で２位、８月に開催された「中日旗争奪びわ湖レガッタ」では優勝を果たしました。

◀ 第74回朝日レガッタの様子。関西みらい銀行提供。

（朝練も日課）

中尾選手は、滋賀県大津市にある商住型店舗の瀬田駅前支店に配属されており、毎日ロビーに立ち、高齢者を中心に来店するお客さまの用件を聞いて窓口に案内しています。ＮＩＳＡ等の推進も行っており、「お客さまに積極的に声をかけ、反応がよいと楽しく感じる」と話します。

５～10月のシーズン中、火曜日から金曜日は、５時30分から７時過ぎまで琵琶湖で朝練をしてから出社します。午後は15時に仕事を切り上げ、16時から18時頃まで練習しています。休日も練習や大会に出場しています。なお、月曜日は練習がなく、８時40分から17時25分の定時まで勤務しています。

中尾選手は、営業店の仲間が快く練習に送り出してくれる等、応援してもらえていることを感じています。先述の朝日レガッタでも、約100人の行員やその家族が応援に駆け付けました。また、中尾選手の活躍がメディアに取りあげられた際には、お客さまからも激励の声をかけてもらっています。

地域に対しては、子どもたちを対象とした体験教室を開催し、ボートの楽しさを伝えています。また、近隣店舗と連携して、営業店の行員総出で琵琶湖等の清掃活動を行っており、行員同士の結び付きも強めています。

▲ 中尾選手の応援に駆け付けた行員たち。関西みらい銀行提供。

（琵琶湖で優勝するために ）

同行は、2025年の滋賀国体優勝に向けて漕艇部の活動に力を入れており、部員も８名程度に増やしたいとしています。中尾選手は、現在、１人乗りのシングルスカルに出場していますが、本来は複数人乗りの種目が得意なため、「部員が増えて、ダブルスカルやクオドルプルなどの種目に出場できれば、もっとよい成績が出せる」と話します。また、漕艇部監督の山崎 智さんは「将来的に、全日本級のレースで上位に食い込む選手を育成していくことが目標」と抱負を語ります。

ボートは後ろ向きでオールを漕ぐため、先頭に立ったときに他の選手の姿が前方に見えるのが、他のレース競技と違うところ。中尾選手はそんな光景を見るために、日夜練習に励んでいます。

▲ 第74回朝日レガッタの受賞式（左は山崎さん、右は中尾選手）。関西みらい銀行提供。

おわりに

本稿では紹介しきれませんでしたが、バドミントンやバレーボール、ソフトボール等、日本のトップリーグに所属したり、全国大会で活躍している地方銀行のスポーツチームは、まだまだたくさんあります。

例えば、七十七銀行硬式野球部は、今年の都市対抗野球大会に４年ぶり14回目の出場を果たしました。東京ドームで開催された試合には、地元の取引先や他の会員銀行のほか、当協会職員も応援に駆け付け、一球一打に熱い声援を送りました。

また、10月に開催された「プリンセス駅伝in宗像・福津全日本実業団対抗女子駅伝競走大会予選会」には、十八親和銀行、鹿児島銀行、肥後銀行の３行が出場しました。３行とも惜しくも全日本大会への出場権は獲得できませんでしたが、肥後銀行の酒井美玖選手は区間賞を獲得する活躍を見せました。

2024年は、パリ五輪が開催されます。パリ五輪には、地方銀行の所属選手が日の丸を背負ってたくさん出場するかもしれません。ぜひみなさん、日本選手を応援しましょう。「がんばれ、NIPPON！！」。